

努力 2008.4ブログ「新・土佐日記」より  
南島原市深江町泉川病院の玄関には「島鉄存続署名」の呼びかけ文が掲示されていた。4月になるとその場所に次の文書が掲げられた。

島原鉄道南線存続運動に、たくさんの署名を頂きありがとうございました。皆様方のご支援を頂きましたが、三月三十一日をもって廃止されることになりました。私たちの努力が足りず、申し訳ございませんでした。

病院長 泉川欣一

「島原半島を未来につなぐ会」の代表世話人として、このたびの島鉄南線存続の中心になって頑張ってくれた泉川先生。南高医師会長という肩書きももっていらっしゃるが、その肩書きは新聞等が解説として補足しただけであって、先生はあくまで一市民として（自分の責任もてる範囲で）一病院長(医師)として、行動なさっていた。

先生の熱意と強い意志と人を思いやる心に触れ、多くの人たちが動いた。僕もその一人として末席（ばっせき）を汚させていただいた。同じく「つなぐ会」にのめりこんで、応援団を形成した同志A君。いつも無口で、よくしゃべる僕とは別のタイプかもしれないが、思いは同じである。

二人並んでこの張り紙を黙読した。思わずA君の口から音声が漏れた。「あんなに努力なされたのに……」しばし呆然と立ち尽くした。

医師会はじめ多くの公職だけでも劇務だ。多忙を極めておいでだった。深夜2時3時まで「活性化再生法」の勉強をなさり、分刻みで電話をかけ、しかも驕ることなく、僕ら年少者に対しても敬意を持って対応なさっていた。短い時間のやり取りで、A君も僕も、先生の労苦を思い、体調や心労を心配していた。いつも頭の下がる思いだった。

（名指してこんなに賞賛すると、そんなこと無いよ、困ってお願いするおじいちゃんおばあちゃんを思えば、苦労じゃないよと、照れ笑いなさるだろう事も十分想像できる。）

その先生が「努力が足りなかった」とおっしゃる。「努力」の言葉の意味をかみしめる。

まとめ（島鉄存続運動から教訓は得られたか）  
対立から協調へ

相手を説得するに当たって、自分の理想をかかげることが、ともすると対立の図式となり実現に至らない事がある。

安易に妥協したり、信念を曲げる必要はない。しかし、譲れることは譲り、協調して実現を第一におくこともあろう。

今回の島鉄存続はまさに格好の事例であった。市民は一様に存続を願い、議員たちも市民の声を反映すればいい。対立を極力避け「みんな仲良く」頑張る事で運動は広がりつつあった。「想い」を同じくする同志においては『仲良く』作戦は有効だった。これは全てのコミュニケーション作りにも通じる。

島鉄存続が実現すれば新境地が開け、政治家松坂が一皮むけるかな……『仲良く』でやっていければそれに越したことはない。そんな想いで関わった。しかし甘くはなかった。

心にも無い嘘をつく輩には通用しない

両市長も・島鉄重役も「残したいのは山々だが……」と言った。しかしそれは建て前でしかなかった。採決の直前まで賛成だった議員たちの何人もが、寝返って反対した。

象徴的な事実が発覚した。請願が通過すれば議会議決（すなわち市民の声）を背景に市長は島鉄の説得が出来、いくばくかの予算出動も可能になる場面なのに、南島原市長は議員に対して請願に反対するよう電話等で働き掛けたのである。

誤解や無知は協調の中で誠意を尽くし相互理解できる。しかし、確信犯でとぼける輩には、裁判に持ち込む覚悟で、戦うしかない。悲しい結論だがそれが現実だ。

努力の不足

為政者たちの嘘は言葉の表面だけなら本当だ、ならばそれを本当にしてしまうだけの世論を作ればいい。市民の声で包囲すればいい。そこまで持って行けなかった。それはやはり努力が足りなかったと言わざるをえないのか。